

論文

『歲月』論

向井千代子

1. はじめに

『歲月』(*The Years*, 1937) はヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の最も円熟した時期 (50~55歳) に最も苦勞して書かれた作品でありながら、一般的評価としては失敗作と見られている作品である。執筆中のウルフの日記から窺われる自己評価も絶望と高揚とが交錯する状態であった。この論文を書くにあたっての筆者の問題意識は次のようなところにある。①『歲月』は大方の批評家の言うように本当に失敗作なのだろうか。もし失敗作であるとしたら、その原因はどこにあるのだろうか。②ウルフの意図はどこにあったのかを執筆中の日記をたどることによって明確にし、そのウルフの意図に沿って作品を読んでみることにする。

2. 執筆過程

日記^(注1)によると『歲月』の原型となるべき小説の構想は既に1931年1月20日^(注2)に現われている。「『私だけの部屋』の続篇で、女性の性生活について書いたもの、多分『女性の職業』という名になるだろう」「これは水曜日にピッパ (Pippa Strachey) の会で読む予定の私の論文^(注3)から浮んだものである」と書かれてあり、その脇に '34年にした書き込みがあって「これはHere and Nowのことだと思う」とある。“Here and Now”は『歲月』のタイトルを思案中にウルフの付けた多くの仮題のうちの一つである。『私だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929) は「女性と小説」の問題に

ついて論じたエッセイであり、ピッパの会でしたウルフのスピーチは手を加えられて「女性の職業」(“Professions for Women”)^(注4) というエッセイとなったものである。このように『歲月』という小説は、最初は全くエッセイとして意図されたものから発生したものである点でウルフの他の小説とは成立を異にしている。「女性の職業」の中で最も有名な一節は、自分たちの世代の女性が職業婦人として自立しようとした時、まず直面しなければならなかった問題は、自分たちの中にある「家の中の天使」(the Angel in the House)を殺さねばならなかった、という一節である。「家の中の天使」とはヴィクトリア朝時代の男性たちが女性の理想として描いた女性像——全く無欲で他人の言うがままになり、家事をとりしきるのに秀でた女性——のことである。

次に1932年7月13日の日記では「一つの有望な小説」(a promising novel)への言及に続けてジョセフ・ライト (Joseph Wright)^(注5)のことを詳しく書いている。この時ウルフはライト夫人 (Elizabeth Mary Wright)によって書かれた『ジョセフ・ライト伝』(*The Life of Joseph Wright, 1932*)を読書中で、ウルフが感動したのはジョセフ・ライトが女性に対して真に平等の立場から行動し、終生、洗濯女をしながら子供たちを育て上げた母親への尊敬心を失わず、また夫人との結婚生活も、夫人を家事労働にくくりつけることなく、夫人の人間性を尊重したからである。^(注6)『歲月』の1880年の章のオックスフォードを描いた部分に出てくるMr. Robsonは明らかにジョセフ・ライトをモデルにして創り上げた人物であり、『歲月』完成以前の、第一稿といえる『パージター家の人々』(*The Pargiters, 1978*)^(注7)では、第6エッセイにウルフのジョセフ・ライトへの尊敬の念が熱っぽく語られている。しかもリースカ (Mitchell A. Leaska)の解釈^(注8)によれば、『歲月』の中心となるパージター家の人々の‘Pargiter’という名前そのものがライトの方言辞典中の“parget”から取られているという。その“parget”の意味は“to plaster with cement or mortar, esp. to plaster the inside of a chimney with cement made of cow-dung and lime” (セメントやしっ

くいを塗りつけること、特に牛糞と石灰で作ったセメントで煙突の内側を塗り固めること)であるという。この解釈はかなり信憑性があると筆者は思う。というのはパージター家の人々の生活を批判的に見れば、彼らは「嘘で塗り固めた」ような偽善的な生活をしているからである。

実際にウルフが執筆に着手したのは '32年秋のことで11月2日の日記には次のように書かれている。

Its[sic] to be an Essay-Novel, called the Pargiters—& its[sic] to take in everything, sex, education, life & c ; & come, with the most powerful & agile leaps, like a chamois across precipices from 1880 to here & now—Thats[sic] the notion anyhow, & I have been in such a haze & dream & intoxication....that I can hardly say I have been alive at all, since the 10th Oct. Everything is running of its own accord into the stream, as with Orlando. What has happened of course is that after abstaining from the novel of fact all these years—since 1919—& N[ight]. & D[ay]. indeed, I find myself infinitely delighting in facts for a change, & in possession of quantities beyond counting : though I feel now & then the tug to vision, but resist it. This is the true line, I am sure, after The Waves—The Pargiters—this is what leads naturally on to the next stage—the essay-novel. (P.129, *Diary Vol. IV*)

(それはパージター家の人々という題のエッセイ・小説となる予定で—そこには性、教育、人生などあらゆることを書きこむつもり。断崖から断崖へと跳ぶ^{かもしか}羚羊のように1880年からこの今現在までこの上なく力強く身軽に跳びたい——ともあれ考えとしてはそうだ。そして私は余りにも霧や夢や陶酔の境にあったので……もう、あの10月10日以来自分が一体生きていたのかもわからない有様だ。『オーランドゥ』の場合と同じよ

うに凡てが自然に流れとなって迸っている。勿論何が起ったのかといえば、
ずーっと——実に1919年の『夜と昼』以来——事実の小説を書いていなか
ったので、気分転換のために事実、そして量を所有するということに思
いもよらず無限の喜びを見出している。もっとも時折ヴィジョンに引き寄
せられることもあるが、それに抵抗している。『波』を書いた後ではこれ
が正しい方向だと思う、パージター家の人々、これこそ当然進むべき次の
段階だ——エッセイ・小説。

かなりのスピードで書いているらしく、12月の日記には「10月11日以来、
60,320語を書いた」とある。翌'33年2月2日には「The Pargiters の第
一章の改訂を済ませた」とあり、ついでにエッセイ部分を切り離すつもりで
あると書いている。

Today I finished—rather more completely than usual—revising
the first chapter. I'm leaving out the interchapters—compacting
them in the text; & project an appendix of dates. (P.146, *Diary*
Vol. IV)

(今日、いつもよりずっと完全に、第一章の改訂を済ませた。私は各章
間に入っている部分を省くことにした——それらを本文中に詰めこもう。
それから日付を付録に付けようと計画している。)

このようにしてエッセイを主体としたものが、エッセイ・小説となり、つ
いにはエッセイ部分が凡てカットされてしまったのである。幸い今日、『パ
ージター家の人々』が刊行されたので、ウルフの初期の意図を私達は知るこ
とができる。それは6つのエッセイと5つの章から成る小説部分から成り、
それらが交互に置かれた形に配列されている。第一エッセイによると、1800
年から2032年^(注9)にわたるパージター家の人々——典型的な英国中産階級の

人々——の生活を描いた（架空の）小説の、1880年の生活を描いた部分からの抜粋を各章で示し、それに続けて現在（'32年）の観点から見た感想をエッセイ部分で提示しようというのがウルフの意図である。この小説部分が『歲月』の1880年の部分となったわけだが、『パージター家の人々』のエッセイ部分を読んでみると、小説の各場面にウルフのこめた意味合いがはっきりと分かる。それはヴィクトリア朝の家父長制社会への反発と憤り、そうした嘘で固めたような社会の中で個人が、特に女性が、如何に抑圧され、拘束されて、歪んだ生活を送っていたかという指摘である。

この後1880年に続く小説の各部分を書いて行くわけだが、'33年4月25日の日記では次のようなことを言っている。

I want to give the whole of the present society—nothing less: facts, as well as the vision. And to combine them both. I mean, The Waves going on simultaneously with Night & Day. Is this possible?.....At present, I think the run of events is too fluid & too free. It reads thin;but lively. How am I to get the depth without becoming static? But I like these problems, & anyhow theres[*sic*] a wind & a vigour in this naturalness. It should aim at immense breadth & immense intensity. It should include satire, comedy, poetry, narrative, & what form is to hold them all together?..... And its[*sic*]to end with the press of daily normal life continuing. And there are to be millions of ideas but no preaching—history, politics, feminism, art, literature—in short a summing up of all I know, feel, laugh at, despise, like, admire hate & so on.
(P.152, *Diary Vol. IV*)

（私は現代社会の全体を表現したい——それ以下ではいけない。ヴィジョンだけでなく事実を。そしてそれら二つを結びつけるのだ。つまり『波』

が『夜と昼』と同時に進んで行くようなもの。これが可能だろうか……………現在のところ事件の流れが余りに流動的で自由すぎると思う。読んでみると薄っぺらだ、が生氣がある。静的にならずに深みに達するにはどうしたら良いのだろうか。でも私はこういう問題が好きだ、それにともあれ、この自然さには風と生氣がある。無限の広がりと無限の強烈さを目ざすべきだ。諷刺、喜劇、詩、物語、そしてどんな形式であれ、それら凡てを支えるようなものを含むべきではないか……そして最後には日常の普通の生活のあわただしさが続いている感じを与えたい。それから何百万という意見はあるが説教はない、というふうにしたい——歴史、政治、フェミニズム、芸術、文学——つまりは、私の知っていること、感じていること、嘲笑したり、軽蔑していること、好きなこと、賞賛すること、憎むことなど凡ての要約なのだ。

9月2日には“Here and Now”という題名が浮ぶ。そしてこれは年代記(Saga)風であるが、決して『フォーサイト・サガ』(*The Forsyte Saga*)^(注10)のようなものを目ざしているのではない、と言っている。翌'34年も夢中で書き続け、やっとどうにか一通り書き上りつつあるのが夏のことで、8月17日には題名として“Music”や“Dawn”というのも考えている。これは最終章(Present Day)の印象が強いため浮んだ名称だろう。9月30日には「名無しの本の最後の言葉を10分前に書き終えた。ほとんど二年かかった」と言ってほっと一息ついている。ついでに題名として“Sons and Daughters”というのを考えている。11月頃から書き直しを始め、12月30日には“Ordinary People”という題名を思いつく。翌'35年には“The Caravan”という名を思いついたりしながら書き直しを続け、7月頃からタイプにかかり、9月には“The Years”という題名に落ち着く。'36年には最後の改訂を続けているが、この年の日記では、完成に近づいた『歲月』に対する熱が芽めかけて、かなり自作に対して批判的になって行く様子がよくわかる。絶望したかと思えば翌日には気を取り直しということが繰り返され、夫レナード(

Leonard Woolf) に見せる前に校正刷を印刷する。

4月頃よりレナードに読んでもらっているが、ウルフは悲観的で、後2ヶ月ばかり病に臥せってしまう。やがて校正刷との格闘が始まり、11月5日にはレナードより「最も注目すべき本だ」と言われて安心するが、前日の日記には「レナードの言うことが正しいと自分に思わせることができない」と嘆いている。その後も絶望している時の方が多く、ウルフ自身の評価では、「現実」の人生を描いたという点ではメリットはあるが、自分の意図したことを十分に表現できなかったという悔いの残る作品であったのだろう。こうしてやっと刊行に漕ぎつけたのが1937年3月のことである。

3. 事 実

Michael Rosenthalは『歲月』は『波』(*The Waves*, 1931)が「ひっくり返しになった」(‘inside out’)小説であると言っている^(注11)が、筆者も彼の意見に賛成である。『歲月』は『波』と背中合わせになった作品であり、両者を合わせ読むことによって読者はより豊かなものを得られるであろう。執筆中の日記にもあるように、『歲月』は『夜と昼』と『波』の両者を取りこもうという意図によって書かれたものである。

作品の構成は年代記風の仕立てで次のようになっている。([]内は充てられたページ数である。)^(注12) 1880年[93頁], 1891年[44頁], 1907年[19頁], 1908年[15頁], 1910年[34頁], 1911年[24頁], 1913年[11頁], 1914年[60頁], 1917年[24頁], 1918年[4頁], 現代(Present Day)[141頁]。ページ数の充て方から最終章に最大のポイントが置かれているのが分かる。ページ数から見て、その他で力点の大きく置かれているのは、1880年と1914年である。歴史上の年代が使われていることを除けば、この構成は『波』と驚くほど似ている。『波』では6人の人物の、幼年から老年に至る中から選ばれた各時期のある瞬間の人物の意識が描かれていたが、『歲月』では1880年から現代(1930年代)までの中から選ばれた各時期のある瞬間におけるパージター家の人々の意識と、その意識を通して彼らの周囲の出来事や事物が描かれている。

『波』ではそれぞれの年令に対応する、一日の海浜風景描写がイタリック体で挿入されていたが、『歲月』では各年代の初めに季節や気候を中心に置いた風景描写が入っている。そして『波』の最後が“*The waves broke on the shore.*”（「波は岸に砕けた」）という無情で象徴的な一行で終るのに対して、『歲月』の最後は“*The sun had risen, and the sky above the houses wore an air of extraordinary beauty, simplicity and peace*”（「太陽は昇っていた、そして家並の上の空はこの上ない美と素朴さと平安の様相を呈していた」）という、希望を孕んだ、静かな夜明けの描写で終わっている。にもかかわらず『歲月』に表明されているものは、『波』におけるよりも更に冷厳で悲惨ともいえる現実認識である。しかもその中で雄々しくも希望を失うことのないEleanorの、リアリスティックで人間味のある態度が印象的でもあり感動的でもある。

まず年代順にパージター家の人々の歴史と当時のイギリスの歴史とを事実に沿って眺めていってみよう。パージター家の人々とは大まかに言って三つの家庭を中心とするものである。一番中心にあるのがAbel Pargiter家で、Abelは元陸軍軍人で「大佐」（Colonel）と呼ばれており、1857年のインドのベンガル原住民の暴動の際に右手の指二本を失っている。1880年の彼の生活はクラブで時を過ごし、時折家族に内緒で困っている情婦の所に通うというもので、その間アバコーン・テラスという彼の自宅では妻が長年寝込んだ末徐々に死に近づきつつある。そして遂にこの日の夜死去する。二人には三人の息子たち（Edward, Morris, Martin）と四人の娘たち（Eleanor, Milly, Delia, Rose）がいる。長女Eleanorは22歳で、病気の母に代って家政を取りしきっており、この日も下町にあるアパートに家賃を取りたてに行ってきたところである。Edwardはオックスフォード大学在学中で、いとこのKittyに恋をしている。Morrisは見習弁護士のように、裁判所に出入りしている。MillyとDeliaは重苦しい家から脱出するために結婚に憧れており、この日も大佐があるパーティーに二人のうち一人だけ連れて行くと言ったので、どちらも行きたい二人の間に険悪な空気が流れる。Deliaはアイル

ランド独立運動の志士、パーネル (C.S.Parnell)^(注13) に憧れている。Martin は12歳位で、ラテン語などを勉強している。この時代は男子は学校へ行かせてもらえたが、女子は家庭での教育しか受けられなかった。一番下の Rose は入浴中に使うおもちゃを買いに一緒に行ってくれる人が見つからないので、夜一人で買いに行き、郵便箱のそばで変質者の男に出会い怖い思いをする。しかし抑圧的な雰囲気は支配する、しかも性的な事柄を口にすることに對する抑圧の特に強い家庭では、自分の被った恐怖の体験を正直に話すことができない。Abelの妻 Rose はヨークシャーの Rigby 家の出身で、そのいとはオックスフォード大学教授 Dr. Malone に嫁いでいる。この Malone 夫妻の一人娘の Kitty はオックスフォードの生活に嫌気がさして、そのこともあって Edward と結婚する意志がない。視点はロンドンからオックスフォードへ跳び、再びロンドンに戻って来て Rose の葬式の様子を描く。この時代の^{上流中産階級の生活が批判的な眼で描かれているのが特徴で、例えば次に引用する Eleanor の言葉からも分かるように、かえってもっと下の階級の人々の方がより正直で真実の生活をしているのではないかというのが作者の感想であると思う。}

The dinner-party ; the Burkes' dinner-party, Eleanor thought. She wished Milly did not always bring the conversation back to marriage. And what do they know about marriage? she asked herself. They stay at home too much, she thought; they never see anyone outside their own set. Here they are cooped up, day after day.....That was why she had said, "The poor enjoy themselves more than we do." (P.32)

(ディナー・パーティー、バーク家のディナー・パーティー、とエリナーは考えた。ミリーがいつも話のけりを結婚のことに持って行かなければいいのと思った。それに結婚のことについて自分たちは何を知っている

だろうか、と彼女は自問した。自分たちは余りにも家にいすぎる、と彼女は思った。自分たちと同じ社会の人々以外の人には決して会わない。ここに自分たちは来る日も来る日も閉じこめられているのだ……だから私は言ったのだわ、「貧しい人たちは私たちよりもずっと生活を楽しんでいる」
って。)

10年後には Kitty は伯爵の家柄の Lasswade 家に嫁いでいる。Milly は Edward の学友であった Hugh Gibbs と結婚し、デボンシャーに住んでいる。Abel は弟 Sir Digby Pargiter の邸を訪ねるが、その美しい妻 Eugénie に密かに思いを寄せている。Digby には Magdaleine (Maggy) と Sara の二人の娘がいるが、Sara の方は小さい時の事故がもとで、不具 (片方の肩がもう片方の肩よりも高くなっている) である。Eleanor は婚期を逸し、慈善を目的とするらしい委員会に属している。Morris は少壮弁護士として活躍し、Celia と結婚している。この日は、1880年には「無冠の帝王」とまで言われてアイルランドの自治権獲得のために活躍していたパーネルが不慮^{コト}の死を遂げた日で、パーネルの死の報道に対する Eleanor と大佐の反応の対^{ラスト}照によって、世代による考え方の差を描いている。Delia はアバコーン・テラスの家を去って、ロンドンのむさ苦しい一角で一人で暮している。Eleanor が Celia と一緒に法廷を見学に行く場面では、勿体ぶった恰好をしてわざわざ時間を長引かせて裁判を取り行う男たちの様子に辟易する Eleanor の描写に作者の批判の眼が感じられる。Sir Digby の一家は一族の中でも最も華やかな一家である。1907年には社交界にデビューの年頃になった Maggy が両親と一緒に馬車でパーティーから帰ってくる場面、家で留守番をしている、寝室の孤独な Sara の様子などが書かれている。その Sara の手元には Edward の英訳したソフォクレスの『アンティゴネ』の本がある。正しい行為をしてかえって生き埋めにされて殺されたアンティゴネの姿は、生きながらの死の生活を余儀なくされている女性の姿の象徴として使われているようである。ところが1908年には Eugénie と Digby が相次いで亡くなり、1910年

には没落を余儀なくされた姉妹のアパートでのむさくるしい生活ぶりが描かれている。パーネルに憧れていた Delia は皮肉にも保守的なアイルランド人地主 Patrick と結婚。Edward は独身を通し、古典文学を研究する学者となって、遂には Sir の称号まで得るほどになる。Rose は政治活動に身を投じ（多分婦人参政権運動に参加しているのだろう）、Martin は軍人となる。1911年には Abel が死去し、Eleanor はギリシアやスペインに旅行し、帰国すると弟 Morris の妻の実家（サセックスの田舎にある）に滞在しに行く。そこで弟の娘 Peggy と息子 North に会うが、もう一人の客人 Sir William Whatney はかつて Eleanor が密かに思いを寄せたことのある男性であった。Maggie はフランス人 Renny（学者らしい）と結婚してフランス南部にいる。1913年に Eleanor はアバコン・テラスを売り払い、40年間忠実に働いてくれた召使 Crosby を解雇する。Crosby は涙ながらに去って行くが Eleanor は邸を手離したことを喜んでいる。1914年の章では、今は大尉となった Martin の視点を中心にして、Sara や Maggie の世界とそれと対照的な Kitty のパーティーの場面とを描き、その後 Kitty に視点を移してパーティー終了後夜汽車でスコットランドに向い、やがて自然に恵まれた広大な荘園でほとと一息つく Kitty の様子が描かれている。'14年は婦人参政権運動がエスカレートして過激となったことで知られているが、Rose はレンガを投げたために監獄に入れられている。これは'14年春のことで、同年の夏には第一次世界大戦が勃発している。Sara は独身を通し、やがてポーランド人の Nicholas Pomjalovsky と愛し合うようになるが、暗示的に書かれているが彼はホモセクシャルで、二人の間に「愛」はあっても結婚は不可能である。Sara は『波』の Rhoda に近い人物で夢想家であるが、Rhoda よりも更に辛辣で、なりふりかまわず、奇矯な振舞が多い。1917年の冬、Eleanor は Renny と Maggie 夫妻の家に食事に招待されるが、その最中に空襲があり地下室に避難したりする。North は出征する。1918年は Crosby の視点から描かれていて、大戦の終りが告げられるが、そんな出来事は Crosby にとってはまるで別世界の出来事のようなものである。1918年には婦人の参政権が認められたが、それは「現代」の

章の会話の中でさりげなく触れられるだけである。

最後の「現代」の章は '30年代のある夏のことで（一般に出版された '37年として解釈されているが、厳密には執筆中の「現代」と考えるべきで '34年か '35年だろう）、Deliaの開くパーティーにパージター家の一族が集まって再会する。そのパーティーと、そのパーティーに行く前のSaraとNorth、EleanorとPeggyの二組の老若のカップルの様子が描かれる。Eleanorは70歳を越しているが、インド旅行から帰ったばかりで老いてますます盛んといった様子。Peggyは女医となっており、37,8歳。Northはアフリカで農場をやっていたが、そこを処分して英国に帰って来たところで、年齢は35歳位だろう。Saraは50代である。

これで一通り表面的な出来事の推移を見て来たわけだが、その他のことで面白いのは1880年には馬車の生活だったのが、やがて自動車が登場し、現代の章には、飛行機、電話、シャワー、ラジオなどが出て来ることである。

4. ヴィジョン（「現代」の章を中心に）

And suddenly it seemed to Eleanor that it had all happened before.....She knew exactly what he was going to say.....As she thought it, he said it. Does everything then come over again a little differently? she thought. If so, is there a pattern; a theme, recurring, like music; half remembered, half foreseen...a gigantic pattern, momentarily perceptible? The thought gave her extreme pleasure: that there was a pattern. (P.398)

（すると突然エリナーには凡てが以前に起ったことがあると思えて来た……彼の言おうとしていることが正確にわかっていた……そう考えていると、その通りのことを彼が言った。すると凡てのことが少し形を変えて再び舞い戻って来るのだろうか。もしそうなら型パターンが存在するのだろうか。一つの主題テーマが、音楽のように何度も繰り返される主題が。半分うろ憶えの、おぼ

半分予見されるような…瞬時にしか感じとれぬ、一つの巨大な^{パターン}型が。その考えは彼女にこの上ない喜びを与えた、型が存在するという考えは。

この「パターン」の意識はEleanorの意識を超えて、この作品全体のモチーフを決定している。つまり「パターン」が人生に感じ取れるというEleanorの直観はプルースト (M. Proust) の『失われた時を求めて』のあの「プチット・マドレーヌ」の経験と同様のものであり、人生についての喜ばしい真実の一部であるのみならず、作品のテクニクとなり、作中での同一主題の繰り返しによって、捕えどころのないに見える作品を支える重要な働きをしているのである。この小説におけるほど作者が「全能」(omnipotent) になったことはない、と筆者には思われる。パージター家についての、プロットの無い、時間の流れにまかされた物語を読みながら、私達読者は同一の言葉や同一の状況が別の人々の意識を通して描かれるのに遭遇する。孤立した複数の人々の体験が作者の頭の中で混じるように、読者の頭の中でも混じり合い、その「繰り返し」の不思議な感覚に読者は身をゆだね、その「繰り返し」の変化、効果から何か作者のメッセージ、つまりは作者の人生観が伝わってくるように感じるのだ。そしてそれらの「繰り返し」の「パターン」が最も大きな交響楽風の働きをするのが最終章の「現代」である。それによってウルフの伝えようとしたものは『波』と同じもの、個を超えて集団として胎動する、大きな流れとしての人生、「波」が象徴するように、個別の存在は死を繰り返しても決して滅びることなく続く生のうねりなのである。

具体的な例を上げてみよう。1880年にパージター家の娘たちは窓から外を見ていた。一台の馬車がやって来て、自分たちの所に停まるかしらと思って期待して見ていたが、それは二軒手前で停まり、一人の若い男が降りて来てその家に入って行く。「現代」の章の最後の場面では、Eleanorが窓外を見ると、一台のタクシーがやって来て、二軒手前で停まり、中から若いカップルが降りて来て家に入って行く。同一主題の反復^{ヴァリエーション}と変奏がここにある。前者は、性的抑圧と不満、男性中心の世界を表わし、後者は男女平等の、均衡

の取れた世界を表わしていると言えよう。他にも細かく見ていけば、このようなテクニックが随所に見られる。が、紙面が足りないので、本論では特に「現代」の章を中心にウルフがどのようなヴィジョンを用いて、この長い小説をまとめあげ、何らかの型パターンを与えようとしたかを見てみよう。

「現代」の章でヴィジョンの中心を担う人物はEleanorとPeggyとNorthである。Eleanorは70歳を越しており、PeggyとNorthは共に30代である。この三人がこの夜のパーティーの場でいずれもそれぞれの形で何か人生の意味を把みかけたという啓示的な瞬間を経験する。そしてその感じは最終的には老年にありながら最も潑刺たる生気を失わないEleanorの意識に収斂されて終る。また、この三人のヴィジョンと呼応するヴィジョンとして、1917年の空襲の夜EleanorがRennyとMaggie夫妻の家で食事をした時に出合ったNicholasの言葉がある。Eleanorが家に入っていくと、この外国人がいて、途中から加わった会話の中で、彼は「我々平凡な人間たちは自分のことがわかつちやいない。で、もし我々が自分自身をわかつていないとしたら、どうして我々に宗教とか法律とかをうまく……」と言いかけて、うまい言葉が浮ばずに口ごもっているので、Eleanorが助け舟を出して「それにふさわしい」(fit)という言葉を補ってやる。Eleanorはその言葉を何気なく口の中で繰り返しているうちに意味の通る一つの文が形成される。「我々は我々自身を知らないが故に、適切な法律も宗教も作れないでいるのだ」と彼が言ったように思えた。「あなたのおっしゃったことは私がよく考えていたことと同じだわ、何て不思議なんでしょう」とEleanorが感嘆の声を上げると、彼は「どうして不思議なんですか。我々は皆同じことを考えているんですよ。ただそれを口にしないだけなんです」と答える。この考えは作者ウルフの思想のかなり核心部にあるものだと思う。ウルフが人々の内面の世界に没入した理由も、ただ単にウルフが内向性の人間であったからだけではなく、政治や社会といった外の世界を、真に正しい方向へと変革するためには、単にやみくもに不満や憤りの念に駆り立てられて行動するのではなく、まず一度内部に立ちかえって、「己れ自身を知る」ことから始めなくてはならない、その後

で立ち現われる行動こそ真に正しい方向へ歴史を導く力を秘めたものとなるであろう、という考えがあったと思われる。

同じ '17年の章で空襲の後全員で「新しい世界のために」乾杯をした後で、Eleanor と Nicholas は次のような会話をするが、これも重要である。

“What are you thinking, Eleanor?” Nicholas interrupted her.....

“About the new world...” she said aloud. “D’you think we’re going to improve?” she asked.

“Yes, yes,” he said.....

“But how...” she began, “...how can we improve ourselves...live more.....naturally...better...How can we?”

“It is only a question.” he said—he stopped. He drew himself close to her—“of learning. The soul...”

“The soul—the whole being,” he explained. He hollowed his hands as if to enclose a circle. “It wishes to expand; to adventure; to form—new combinations?”

“Yes, yes,” she said, as if to assure him that his words were right.

“Whereas now,”“this is how we live, screwed up into one hard little, tight little—knot?”

“Knot, knot—yes, that’s right,” she nodded.

“Each is his own little cubicle; each with his own cross or holy book; each with his fire, his wife.....” (pp.318—9)

(「何を考えているんですか、エリナー」とニコラスが言ってエリナーの思考を遮った……)

「新しい世界のことを…」と彼女は声に出して言った。「私たちは良い方へ向っているのだと思いますか」と彼女はたずねた。

「ええ、ええ、そう思います」と彼は言った……

「でもどうやったら…」と彼女は言いはじめた。「…どうやったら私たちは良くなれるのでしょうか……生活がもっと……自然で……良いものになるのでしょうか……どうしたら」

「それはまさに」と言って——彼は口をつぐんだ。彼女の方に身を寄せて言った——「学ぶことが問題です。魂…」……「魂は——全存在は」と彼は説明した。彼はまるで一つの環を取り囲むかのように両手で窪みを作った。「それは拡大し、冒険することを望んでいます。そして作り上げたいと望んでいるのです——新しい結合をですか？」

「ええ、ええ」と彼女は、まるで彼の言葉が正しいことを彼に保証するように言った。

「それなのに今の」……「我々の生活ぶりはこんな風です、締めつけられて一つの固い小さな、固く締った小さな——結節をなしているとでもいいでしょうか？」

「結節、結節——そう、その通りですわ」と彼女はうなずいた。

「誰もが自分だけの小さな小部屋に閉じこもって、誰もが自分だけの十字架とか聖典を抱えて、誰もが自分の暖炉とか妻とかを持って……）」

この二つの場面を念頭に置いて「現代」の章を読んでみると、同様の見解が形を変えて Peggy, North, Eleanor の意識の中に出て来るのに気付かされる。‘knot’（結び目、結節、節こぶの意）の比喩で表わされているのは ‘I’（自己）の観念で、それは時には否定的に（PeggyやNorthの場合）、時には肯定的に（Eleanorの場合）扱われる。「自己」は経験の中心であるという意味で大切だが、一方、「自己」を主張し、「自己」を守る気持が強すぎると、人々は皆、己れの殻に閉じこもり、利己主義を募らせ、この世は誤解と虚偽に満ちることになる。例えば Eleanor は 395 ページで自分の人生のことを考えて、今現在の瞬間の意識とその背後に連る記憶の集積を考え、思わず手を握りしめると、手に持っていた固い小銭に触れ、多分人生の中心に

は「自己」という、一つの「結び目」、一つの「中心」が存在するのだろう、と考える。又、389ページで Peggy は自己主張ばかりしたがる若者にうんざりして次のように呟く。

I, I, I—he went on. It was like a vulture’s beak pecking, or a vacuumcleaner sucking, or a telephone bell ringing. I, I, I. But he couldn’t help it……. He could not free himself, could not detach himself. He was bound on the wheel with tight iron hoops.

(僕は、僕は、僕は——と彼は言い続ける。それはまるでハゲタカが^{くちばし}嘴で突ついているか、電気掃除機が吸い続けるか、それとも電話のベルが鳴り続けているのみたいだわ。僕が、僕が、僕がって。でも彼にはどうしようもないのだわ……彼は自分を解き放つことができない、彼は自己から超然とすることができない。彼は固い鉄の輪のはまった車輪に縛りつけられているのだ。)

North についても同様の見解が Hugh と Milly の話を聞きながらの意識の中に表われる。そして Maggy に自分の思いを伝えようと思いつきながら、一瞬 Maggy できえ「利己主義」の内にこり固まっているのではないか怪しみ、「我々は『自分の』子供のこととか、『自分の』所有物のこととなると、急に攻撃的になり、相手の腸^{はらわた}を引き裂いたり、喉笛にかみついたりする。我々はお互いに助け合うことができない、我々は皆ゆがめられている」(pp. 409—10) と絶望的に考える。Edward と話し合っていた時も彼がギリシア語の一節(『アンティゴネ』からの引用で、「私は愛するために生れたので、憎むために生れたではありません」の意味のもの)を口づきんだので、「それを英訳して下さい」と頼むが、Edward は訳してくれないので次のように考える。

It's no go, North thought. He can't say what he wants to say; he's afraid. They're all afraid; afraid of being laughed at; afraid of giving themselves away. He's afraid too, he thought, looking at the young man..... We're afraid of each other, he thought; afraid of what? Of criticism; of laughter; of people who think differently That's what separates us; fear, he thought. (P.447)

(無駄だ、とノースは思った。彼は自分の言いたいことが言えない、彼は怖れているのだ。誰もが皆、怖れているのだ。嘲笑されることを怖れ、自己を他人の手に委ねることを怖れている。あの男も怖れている、と彼は若者を見つめながら思った……我々はお互を怖れているのだ、と彼は思った。一体何を怖れているのか。批判や嘲笑、自分とは異った考え方をする人々のことを……それが我々をばらばらに引き離すのだ、怖れる気持が、と彼は考えた。)

最終章においてPeggyが最も悲観的で、例えばEleanorが「自分は幸せだ」と言うのを聞いて、「この悲惨さにあふれる世界の中で人はどうして『幸福』であり得ようか。街角ごとのどのプラカードにも『死』と書いてあるというのに——いやもっと悪いことが、圧政とか残虐とか苦悩、文明の崩壊、自由の終焉といったことがあるというのに」(P.418)と考える。これはこの小説を書いていた時のウルフの意識の表面にあった、偽らざる気持であつたろう。「現代」の章には、Eleanorがヒットラーと思われる男の顔写真の載った新聞を憎悪をこめて引き裂く場面(P.356)やNorthがやはり重要なヴィジョンの瞬間(P.442)に、「黒シャツや緑シャツや赤シャツなんか駄目だ」(「黒シャツ」はファシスト党员、「緑シャツ」はダグラス党员、「赤シャツ」は革命党员を表わすという)^(注14)「内面から始めるのだ」と言うのもウルフが当時のヨーロッパのファシズムの傾向の高まりやスペイン戦争などに危機感を抱いていたことの表われである。

そして注意すべきは、この現状に対する苛立ちや絶望の瞬間が同時にヴィジョンの瞬間と表裏一体をなしていることである。Peggyの場合は、この世の悲惨について考え続けているうちに、何か^{ひと}が分かりかけたような気がしてそれを他人に伝えようとするが、うまく表現できず、（又同時に周囲がそうした声^{ひと}に耳傾けようとし^{ひと}ない様子も描かれているのに注意すべきと思うが—その時、Peggyの気持を察して「ペギーが何か言いたがっているわ」と言ってくれるのはEleanorである）口に出してみると、Northを傷つけるようなことを言ってしまう。つまり「あなたは結婚し、子供を持ち、お金を作り、ちっぽけな本を書いたりするでしょう、生きる代りに……違ったふうに、違った生き方をする代りに」（P.421）と言う。Northを怒らせてしまったことをPeggyは悔やむが、それでも、下手な方法でも自分は自分の意図を伝えようとしたのだと独白する。この場面は非常に暗示的である。つまり人間の不完全さ、人と人とのコミュニケーションの難しさを意識した上で、それでも、傷つけ合っても伝達しようとすることの大切さをウルフは感じていたと思われるからである。Peggyの言葉は傷つけられたNorthの心に滞って、やがてNorthにヴィジョンの瞬間が訪れた時、NorthはPeggyの言いたかったことの真意を理解する。「違ったふうに生きる」（to live differently）という言葉がキイ・ワールドとなって繰り返され「もう一つの世界」（another world）、「新しい世界」（a new world）という言葉とも結びついて（P.456）、最終的にはEleanorのヴィジョンの中に収斂する。

There must be another life, she thought, sinking back into her chair, exasperated. Not in dreams; but here and now, in this room, with living people. She felt as if she were standing on the edge of a precipice with her hair blown back; she was about to grasp something that just evaded her. There must be another life, here and now, she repeated. This is too short, too broken. We know nothing, even about ourselves. We're only just beginning, she

thought, to understand, here and there. She hollowed her hands in her lap.....She held her hands hollowed; she felt that she wanted to enclose the present moment; to make it stay; to fill it fuller, and fuller, with the past, the present and the future, until it shone, whole, bright, deep with understanding. (pp.461-2)

(別の人生があるにちがいない、と彼女は感情を昂らせて椅子の中に身を沈めながら思った。夢の中ではなくて今、ここに、この部屋の中に、生きている人々と一緒にいて。彼女はまるで自分が断崖の際に髪を後ろになびかせて立っているかのように感じた。たった今、彼女をすり抜けて行った何物かを今まさに把みかけていた。もう一つの人生があるにちがいない、ここに今、と彼女は繰り返した。これでは余りにも短かすぎる、余りにも断片的にすぎる。私たちは何も知ってはいない、自分たち自身のことについてさえ。私たちはたった今理解し始めたばかりだ、ここ、かしこで、と彼女は思った。彼女はひざの上に両手で窪みを作った……彼女は両手で作った窪みをそのままにしておいた、この現在の瞬間を取り囲み、それを持続させ、それを過去・現在・未来によって、だんだん一杯に満したい、それが全一に、明るく、深い理解によって輝き渡るまで、と思った。)

‘another life’ (別の人生、別の生き方) という言葉は ‘to live differently’ という言葉と呼応し、‘hollow’ (窪み) は1917年の章で Nicholas の作った「窪み」に呼応する。Eleanor は共感を求めて Edward に話しかけるが、彼は別の話を North としていて耳を貸さない。Eleanor は両手を開いて (= ‘hollow’ をこわし) 「無駄なことだ」と思う。「それはこぼれてしまうにちがいない、落ちてしまうにちがいない」そしてその後には「自分にも涯しない夜、涯しない闇がやってくるにちがいない」と考える。これは共感を求める努力への絶望と、その後自分にも訪れる死の予感を表現している。しかし文はそこで終らず、Eleanor は「闇」のことを考えようとするが考えら

れなかった、何か彼女の試みを挫折させるものがあつた、あたりが明るみ始めていたのだった、と続いている。この部分をどう解釈するか。「別の人生」とは、個別に断片的に生きる生き方ではなくて、お互いに理解し合い、協力することによって築く、個を超えた生き方を暗示すると思う。そのような努力によって人類の「持続」(continuity)は保たれるものであるし、個々の人間の「死」というものを乗り越えられるのである。しかしそのような試みはなかなか成功しないことを次のEdwardとの関係で描き、「死」の恐怖が蘇ってくるが、再び希望が沸いてくる、闇(=死)と光(=生)との、永遠の死と復活を日々繰り返す、「自然」の営みを観察することによって、というふうに筆者はこの部分を読み取る。

この後最後の挿話として、パーティーがお開きになる寸前に管理人の二人の子供たちの歌う意味不明の歌がある。それは全く何語とも説明のつかぬ、耳障りな歌で、しかもその歌は途中で終ってしまう。誰もが呆然としてしまう。しかし、その歌の印象を表現しようとしてEleanorは“Beautiful?”(P.465)という表現をする。それは少しも耳に快く響かないのだけれど……

この歌は何を暗示するのだろうか。筆者の勝手な解釈を許してもらえば、これは人間の最も動物的な、根源的な、コミュニケーションを求める叫びなのだ。そう、言葉とはその発生時には本来そのようなものではなかっただろうか。そしてこの最後の情景は不思議なほど『幕間』(Between the Acts, 1941)の最後の情景——Giles夫妻が二人っきりで対座すると、突然、家の外形が取り払われ、二人は原始時代さながらの闇の中に、一つがいの狐のように向き合っており、そこで初めて本当の劇の幕が上がる、という幕切れに似ている。

この小説でウルフのしたことは、社会の小説とみせかけながら、最も反社会の小説を書いたこと、言葉に溢れながら、しかも最も「沈黙」について小説を書いたことである。ウルフの社会性というのは、「まず内面から始めなければ」というNorthの言葉にもあるように、内に深く沈潜して後に水面に浮び上ってくるような種類の社会性で、一見、社会的な効力が非常に弱い

ように見える。ウルフがこの小説で「ヴィジョンに逆らって書いた」故にウルフはここで「転向」したのだ、という見解^(注15)が、日本の学会では一般的であるけれども、ウルフの社会批判とウルフのヴィジョンとは表裏をなしているのであり、『歳月』は当然『波』の発展線上にあるというのが筆者の見解である。

5. 評 価

『歳月』は論じるのも難しければ、評価するのも難しい作品である。しかし時が経つにつれて少しずつ評価が高まってくるような作品であると思う。それは『幕間』についても同様であるだろう。両者ともヨーロッパが二度目の大戦に突入しつつある時代に書かれた作品であるために、非常に悲観的絶望的なムードを漂わせているので、ウルフの自殺（1941年3月）という事実にも影響されて、後期のウルフの衰えを示す作品という評価がまだ一般的であるけれども、「社会にコミットしない審美家」という、初期の批評家によってウルフに貼られた一つのレッテルなり、一つの神話がつき崩されて行くにつれて、「社会」や「時代」に対する個人の関係という形で、より大きな広がりを持つ後期二作の評価は徐々に高まってくるであろうと筆者は考える。ウルフの小説の欠点は、「ヴィジョン」の世界と「事実」の世界との乖離あるいは亀裂と一言で言えるだろうが、中期の作品がその亀裂を意識しつつも「ヴィジョン」に引きつけ、その中にくるみこもうとして出来上ったのに対して、後期の作品はそこに喜劇と悲劇、散文と詩、絶望と希望、醜と美との一大‘mixture’（混沌）を持ちこみ、「繰り返し」や「対照」の方法によって、つまりは音楽的な手法によって、亀裂を亀裂として提示したものであると思う。そしてそこではフォースター（E. M. Forster）の『ハウズ・エンド』（*Howards End*, 1910）におけるように^(注16)“Only connect”という願いは現実には達成されず、一つの叫びとなって宙に飜しているのである。

— Notes —

1. 日記の資料としては、Leonard Woolf 編の抜粋集、*A Writer's Diary* (Hogarth Press, 1965) と、*The Diary of Virginia Woolf Vol. IV: 1931-35*, ed. Anne Olivier Bell (Hogarth Press, 1982) とを用いたが、引用文のページ数表示は後者によった。以後 *Diary Vol. IV* と表示する。
2. *Diary Vol. IV*, p. 6
3. Pippa こと Philippa Strachey は the National Society for Women's Service の書記をしており、彼女の依頼でウルフは '31 年 1 月 21 日に会のロンドン支部で女性と職業に関するスピーチを行った。
4. "Professions for Women" は、*The Death of the Moth and Other Essays* (Hogarth Press, 1942) に収録されて刊行された。スピーチのもとの原稿は *The Pargiters*, ed. Mitchell A Leaska (Hogarth Press, 1978) に収録されている。
5. Joseph Wright (1855-1930) は Yorkshire の石切り工の子として生まれ、独学で諸国語を習得し、ドイツで言語学を学び、遂にはオックスフォードの比較言語学の教授となった人で、全 6 巻から成る方言辞典 *The English Dialect Dictionary* (1896-1905) でその名を知られている。
6. *The Pargiters* の第 6 エッセイでウルフは次のように言っている。".....his conception of marriage was revolutionary. His wife was not to darn his socks; she was not to do housework. 'It is my greatest ambition that you shall live, not merely exist; and live too in a way that not many women have lived before.'" (P.155)
7. 注 4 参照。
8. *The Pargiters* の編者 Leaska の Introduction P. xiv 参照。
9. 「2032年」という表示はウルフがわざと未来まで取り込む架空の小説を考えていたのか、それとも単なるウルフの誤記 (1932 のつもりだった) に過ぎないのか、不明である。
10. John Galsworthy の、*The Forsyte Saga* (1922) のこと。ウルフは "Modern Fiction" (1919) で Arnold Bennet, Galsworthy, H. G. Wells といった作家たちを 'Materialist' と言って非難していただけに、Galsworthy 風作品と見られたくなかったのだろう。
11. M. Rosenthal: *Virginia Woolf* (Columbia Univ. Press, 1979), p. 170 参照。
12. 頁数の計算は Hogarth Press 版による。
13. C. S. Parnell (1846-91) は、議会を通じてアイルランドの自治のために運動し、Gladstone や自由党の人々の賛同を得て活躍したが、私的スキャンダルのために失脚し、失意のうちに死んだ。

14. この指摘は坂本公延氏の指摘に負っている。坂本公延著『ヴァージニア・ウルフ——小説の秘密』（研究社，1978）P.265参照。
15. 野島秀勝著『美神と宿命——V・ウルフ論』（南雲堂，1962）に代表される見解。坂本氏の著書（14の注参照）中の、『歲月』論の副題は「ウルフの転向」である。勿論ウルフ自身日記中に「ヴィジョンに抵抗している」と書いているから、このような解釈は根拠がないとはいえないが、筆者は、小説が完成に近づくにしたがって、ウルフが、この小説は『夜と昼』と『波』とが結びついた小説である、と言っている事実の方に力点を置きたい。
16. 『ハワーズ・エンド』の巻頭言は“Only connect.....”（「ただ結びつけられれば……」）である。

* *The Years* からの引用文の頁数表示は Hogarth Press 版によるものである。